



「よそのもののサル」

高橋桐矢

夕暮れ時、小さなサルが一匹、山道を急いでいました。

群れでねぐらに帰るのに、寄り道していておくれてしまい、近道を通ることにしたのでした。じめじめした暗い道には大きなシダがたくさんはえています。かまぐびをもたげたヘビかと思ったら、ぜんまいの若葉でした。

「ぼくはヘビなんてこわくないや」

腐った倒木の横を通ろうとして、はっとしました。

倒木の根元に、見たことのない知らないサルがすわっています。

えさ場には、ほかの群れのサルもやってきますが、このあたりでよそのもののサルを見ることはありません。

どこかに向かう旅の途中なのでしょうか。迷ってしまったのでしょうか。

よそのもののサルが、ふせていた顔を上げました。くたびれた無愛想な顔でした。

小さなサルは、そのわきを、どぎまぎしながら小走りに通り過ぎました。

旅の途中で、疲れて休んでいるところなのかもしれない。あんまり休むのに気持ち

のいい場所には思えません、とにかく、そつとしておくほうがいいでしょう。

じろじろ見るのも失礼なので、小さなサルはふりかえりませんでした。近道を通ったのですぐに群れに追いつきました。

いつもの木の上のねぐらで丸くなりながら、あのよそもののサルのことを思い出しました。ずいぶんつかれて年を取っているように見えました。でもきつと一晩休めば、力をとりもどすでしょう。

次の日、小さなサルは、みんなといつものようにえさ場へ向かいました。

一日えさ場で過ごして、夕方にねぐらの森に帰ります。

「そろそろ戻るぞ」

ボスの声に、みんな思い思いに、木を伝ったり地面を走ったりして行きます。

小さなサルは、なんとなくまた近道を通ってみようと思いました。一人で向かいました。

倒木の根元に、昨日のよそもののサルがいました。

昨日と同じようにすわっています。目はとじていますが、時々、お腹のあたりを、ぼりぼりと指でかいているので、眠っているのではないようです。

よそもののサルが目を開けました。小さなサルはあわてて顔をそらしました。

「さあ、いそがなくちゃ」

つぶやきながら、小さなサルは、じめじめした道をそつと歩いていきました。

よそもののサルがじつと見ている気配がします。見られている居心地の悪さを感じながら、小さなサルは走って道を通り過ぎました。

その次の日、小さなサルは、友達と一緒にえさ場から帰ったので、近道は通りませんでした。「ああそういえば」と、よそもののサルのことを思い出したのはねぐらに戻ってからでした。もうきつと今ごろは、どこかに行ってしまったでしょう。でも、明日、もう一度だけ、あの近道を通ってみよう、と小さなサルは思いました。

次の朝。小さなサルは、えさ場に向かうのに、近道を行いました。

もういないだろうと思ったのに、よそもののサルは、この間と同じところに同じかっこうですわっていました。うつむいて眠っているようです。

今度は少しだけ近づいてみました。

よく見ると、毛もばさばさでかわいています。病気なのかもしれません。声をかけてみようか、と思いました。

でもおとといもその前も会っているのに、いまさら「こんにちは」はない気がします。と、いっていきなり「大丈夫ですか」と聞くのもどうでしょうか。

考えるほどになんと言えればいいかわからなくなりました。

ここは群れのサルも近よらない道です。こんな場所にいるのは、だれにも会いたくないからかもしれません。

ひとりで休んでいたいのなら、声をかけても迷惑がられるだけでしよう。

人嫌いの変わり者なのかもしれません。

だって、あいさつ一つしないのですから。一番最初にむこうから「こんにちは」と言ってきたら、小さなサルだって、ちゃんとあいさつを返していました。

小さなサルがそんなことを考えていると、いつのまにか、よそものサルがじっと見ていました。

あいかわらず一言も話さず、だまっただままです。

用事があったら、話しかけてくるはずです。

放っておいてくれと思っているから、だまっているのでしょうか。

じっと見ているのは、早くあつちにいけという意味なのでしょうか。とうとういたたまれなくなつて、小さなサルは、走り出しました。

えさ場についてから、木の実を食べながらも、気持ちはうわのそらでした。

もしかしてやつぱり、よそものサルは、具合が悪いのかもしれない。

帰りに通るとき、あいさつだけでもしてみようか……もしそれで、いやな顔をされても、何もしないよりはいいように思えました。

「よし、そうしよう」

ふと気づくと、近くの木の実は、あらかたほかのサルに取られてしまっていました。小さなサルは、あちこちの木の枝を伝って新芽を集めて、ほおぶくろにいつぱいつめこみました。

もう一つ、そう思って新芽に手を伸ばしました。

友達のサルも同じく手を伸ばしていました。

小さなサルは、友達の顔を見て、はっとしました。耳にかみつかれたあとがあります。「どうしたの？」

友達は、ぷんと顔をそむけました。小さなサルは、そむけた顔のほうへ行きました。

「どうしたの。いたいでしょう」

「いたくないさ」

そんなはずはありません。赤くはれて、見るからにいたそうです。

「だれにやられたの」

小さなサルは、心配して聞きました。ところが友達のサルは、歯をむきだして怒りだ

しました。

「うるさいな、ほうっておいてくれよ！ 大きなお世話だ。おせっかいやろう！」  
友達のサルがふりまわした手が、小さなサルをぶちました。友達のはつとした顔をしました。口はつぐんだままでした。

小さなサルは、ぶたれた頬より、もつとずきずきと痛い心をかかえながら、友達のそばをはなれました。

心配しただけなのに。

大きなお世話。おせっかい。

友達の言葉が、胸につきささりました。

その夜は、ねぐらに戻ってからもなかなか眠れませんでした。もちろん、近道は通らないで帰りました。

もう金輪際、だれのことも気にするもんか、と思いました。

だれがどこでどうなろうと、知ったことじゃない。

大きなお世話のおせっかいは、もうやめです。

よそのもののサルにも、声をかけなくてよかったです。

きつと、よそのもののサルだって、だれにも話しかけられたくないでしょう。

次の日も、その次の日も小さなサルは、近道を通りませんでした。群れのサルはだれもあの近道を通りません。じめじめした暗い道には、サルが大きらいなヘビがいることが多いからです。

そうして数日がすぎました。

朝ねぼうしてしまった小さなサルは、近道を通ることにしました。

もうよそのもののサルもいないでしょう。こんなじめじめした暗い道は、よそのものサルだって居心地が悪いはずです。

小さなサルは、倒木の手前で立ち止まりました。

よそのもののサルの代わりに、タヌキがいました。倒木の根元に穴をほっています。

小さなサルに気づいたタヌキが顔をあげました。

「おや、あんちゃん」

小さなサルは、思い切ってたずねてみました。

「このへんに、年取ったサルがすわっていますませんでしたか？」

「やっぱりあんちゃんだったのかい。あのじいさんザルの知り合いかい？」

「いいえ。全然知りません。通りすがりに見かけただけで」

そう答えましたが、よくみるとタヌキは、穴をほっているのではなく、うめたところ



のようです。小さなサルは、胸が苦しくなつて口をばくばくさせました。

タヌキは、うんうんとうなずきました。

「しかたないさ。わしが見たときはもう虫の息だった。のどがかわいたというんで、せめて水でも飲ませてやろうかと思つたが、それもかなわんかった。行き倒れだな。長い旅をしてきたが、ここですわつたつきり、もう立ち上がれなくなつたらしい。せめてうめてやろうと思つてな。最後にあんちゃんのことを言つてたよ」

「な、なんて？」

小さなサルは、かすれた声で聞きました。

タヌキは、遠くを見るような目で答えました。

「通りかかった小さなサルが、故郷の息子に似てたつて」

そのとたん、小さなサルは、わつと泣きだしました。

そんなこと何にも知りませんでした。

最初の日に声をかけていけば、助かつたかもしれませぬ。

水を飲ませることはできたでしょう。

せめて、話し相手になることが、どうしてできなかったのか。

あいさつさえも、できませんでした。

何度も、何度もこの道を通ったのに。

へビがいるからだれも通らない、この道を、自分だけが何度も通りかかったのに。自分がくやくしくて、悲しくて涙が止まりません。

泣きぬれた小さなサルは横で、タヌキがしんみりとつぶやきました。

「じいさんよ。よかつたな、あんた。野垂れ死にかもしれんが、見も知らないあんちゃん、あんたのために泣いてくれているよ。死んだときこんな泣いてくれる人がいるなんて、幸せものだよ」

小さなサルは、それを聞いて泣きくずれました。

「ちがうんです。ちがうんです……」

タヌキは、優しくさとすように言いました。

「いや、いいんだよ。よそのもののサルのために、泣いてくれてありがとうな」

小さなサルは、はげしく首をふりました。でもそのうちに自分のために泣いているのか、よそのもののサルのために泣いているのか、分からなくなってきました。

ただ、あーん、あーんと声をあげて泣きました。